

令和5年度 第1回生活支援・介護予防体制整備推進協議会 議事録

日 時 令和5年7月31日(水) 13:30~15:20

場 所 刈谷市役所 101会議室

出席者:

区 分	所 属	名 前
生活支援コーディネーター (SC)	刈谷富士松地域包括支援センター	生島謙一郎
	刈谷雁が音地域包括支援センター	伴このみ
	刈谷中部地域包括支援センター	倉川叔子
	刈谷中央地域包括支援センター	磯部亮子
	刈谷依佐美地域包括支援センター	千葉伸一
	刈谷朝日地域包括支援センター	鈴木健司
各種団体を代表する者 (民間企業・NPO法人・協同組合・ボランティア)	株式会社豊田自動織機	鈴木智晴
	NPO法人 我がまちの縁側	野島美智子
	かりや愛知中央生活協同組合	林孝志
	あいち中央農業協同組合	杉浦弘美
	刈谷市民ボランティア活動センター	米田正寛
民生委員	刈谷市民生委員	塚本裕章
民生委員	刈谷市民生委員	深谷由美子
社会福祉協議会の職員 (社会福祉法人)	刈谷市社会福祉協議会	川口剛史
市の職員	刈谷市役所 長寿課	杉山文章 (欠)
オブザーバー	刈谷市基幹型地域包括支援センター	鈴木敦史
アドバイザー		塚本鋭裕

1 議 題

(1) 昨年度の推進協議会の振り返り (資料1の議題1を説明)

(2) 高齢者・介護人材の現状 (資料1の議題2を説明)

発言委員等	意見
委員	<ul style="list-style-type: none"> 当介護事業所は定員20名のサービスで、職員に欠員が出たとき、募集しても集まらないが、口コミでなんとか職員を雇うことはできている。 昔、デイサービスに通う人は、介護度が要支援や要介護1の人でも、比較的活動できる人が来ていた。しかし今は認定期間が長くなったため、同じ介護度でも実際には介護度が上がっている可能性のある高齢者がおり、自身でできることが少なく支援の手がかかる。介護現場の補助として、はつらつサポーター、愛知介護サポーターバンク、学生のボランティア等に手伝ってもらおうことを考える必要がある。 専門的な業務は職員が行い、レクリエーションや話し相手などはボランティアにやってもらう。専門的な業務や身体的な介護などは職員がやるので、負担の大きい職員のなり手のハードルが高い。 単身高齢者世帯が増えた。地区の活動の担い手が不足している。活躍できる高齢者人口と介護が必要な高齢者人口の違いが顕著。
会長	<ul style="list-style-type: none"> 地域の状況はどうか。

発言委員等	意見
委員	<ul style="list-style-type: none"> 土地柄によってレベルが違う。家庭環境や住まいの状況により、同じ介護度でも違う状況。
委員	<ul style="list-style-type: none"> 15万人の市民のうち3万人が高齢者。うち1万人が当包括支援センターエリアの高齢者。 管轄する地域に住む高齢者の人口が多く、似た生活環境（高齢者のみ世帯が多い）であるため、高齢者が高齢者を支えるという状態になる。 地域とのかかわりを持つとしない高齢者もいる。
委員	<ul style="list-style-type: none"> 当組織には中規模のデイサービス2つあるが、人手不足。それが課題だが、ボランティア団体などになんとか助けられている状況。
アドバイザー	<ul style="list-style-type: none"> 65歳を高齢者の一つの区切りとしているが、74歳までは元気な人が多い。75歳以上の後期高齢者の推移を意識したうえで見ていくと、まだ刈谷市は全国と比べ、20年ほどずれがある、今の段階からどう若い人に地域の支え合いの意識を持ってもらうかが重要である。 要支援1・2、要介護1の状態の人の増え方が著しい。それらの人や、フレイル状態の人が重度化しないように予防するという視点が大切。介護人材は集まりにくい、他市よりも若い人が多いため、準介護人材としてボランティア意識を高めてもらう。また、老老世帯、高齢者の単身世帯が多いことが資料でわかる。それに加えマンション、アパートに住んでいる人も多い。そういった人への介入が難しいため、関わり方をどうするか、取り組みをどうするか考える必要がある。若い人・企業をうまく巻き込んでいくことが重要ではないか。

(3) 実態調査の結果（資料1の議題3を参照）

発言委員等	意見
委員	<ul style="list-style-type: none"> カフェスペースに来る60代・70代に話を聞くと、生活支援の協力に対して意識の高い人、そうでない人と別れる。 地域の役員を終えた方で元気な方の話を男女問わずよく聞く。そういった方々へボランティアなどを薦めていけたらいい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ボランティアへの意識を持っている方はたくさんいる。どうつなぎ合わせていくかなど、仕組みづくりをどのくらいの時期からやるべきか考える必要がある。
委員	<ul style="list-style-type: none"> アンケートをやった際、地域の担い手をやってもらえるか、地域のために何かやれることはありそうか確認したところ、7、8割は協力的な回答を得られた。 80代後半は難しいと答えていたが、支えられる側であるとの認識。 比較的身近な顔が見える人を助けていきたいという考えの方が多い。
委員	<ul style="list-style-type: none"> 野田・東刈谷は、ボランティアをやってみたいという人はいるが、システム、仕組みがないため、やり方がわからない。 学生や高齢者でも元気な方がいらっしやるので、地域で支える仕組みがあったほうがいい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> 個人を支援するボランティアの紹介はやっていない。高齢者へ特化したボランティアの仕組みを作るのに、企業がもう少し関わっていいのでは。65歳以上の働き手の休み、空き時間に手伝いが出来たらいいと思う。自身も高齢者のみ世帯で近所も高齢者のみ世帯は多い。しかし、近所づきあいが希薄だから心配。

発言委員等	意見
アドバイザー	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者の気持ちとしても5、6割は「いいよ」と言ってくれる。ただ実際に行動するとなるとどうなるか。 ・ 一人だと参加しにくい。①地域活動だと近所の人と参加しやすい。1層の生活支援・介護予防として考えると、小牧市のように地域活動に対して、ポイント（インセンティブ）を付与する制度もある。②サポーター養成講座などで資源を掘り起こすための講座があってもいいのでは。2層の生活支援コーディネーターがやってくると行動に起こしやすい。社協の地域福祉士やボラセンなどと連動して個別のマッチングまでやれるといいのでは。③それを評価してPRしていく。④企業向けふるさと納税の様な、企業を退職された65歳以上の方が地域貢献できるといいのでは。

(4) 他市の事例

①住民参加型の支え合い（資料1の議題4①を説明）

発言委員等	意見
会長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知っている人に支えてもらいたいという人もいれば、知っている人だからこそ支えられたくないという人もいる。他市の事務局側はマッチングの時に気を付けていることは何かあるか。
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・ マッチングは非常に大事にしている部分なので、利用者の要望に沿う形でのマッチングをしているのではないか。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ カフェに来る4、5人に生活支援の対価として仮想通貨のようなものを作り、仲間内で回すという構想を話した。もし市としてそのようなことをやってもらえるなら、やりたい人にとっては需要がある。自身が近所の高齢者の家の木を切る支援をした際も、声掛けを頑張った。頼む側も遠慮、申し訳ないという気持ちが強く頼みづらいのではないか。やりたい側もどこから助けるかわからないという人もいる、地元でそういう仕組みがあったら参加したい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 10年ほど民生委員を担っているが、地区の高齢化が進んでいるため、このままいくと自治会が続かない。子供たちに地区のお祭りや運動会などの場でボランティアの種を植えることができないか。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当組織でも子供たちに対するボランティア活動はあるにはあるが、点でありつながらない。市全域で行う大きい単位の仕組みだけでなく、自治会や近所という小さい圏域で参加してもらう仕掛けもないといけないのでは。地域福祉委員会のようなところと協力しながら、継続した取り組みを学年ごとに展開したほうが、ボランティア活動を行おうという子供が育っていくのではないか。
会長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実際に講座を地域でやられるときに、お子さんなど若い子たちの支え合いの意識は高いか？
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当組織で行っているのは福祉教育の観点で単発のものが多い。例えば、ボランティア活動で車いすの方の介助をしたが、日常でそれができるかという継続性の難しさが課題。身近なところで小さくてもいいので続けていけるという仕組みづくりが必要ではないか。
アドバイザー	<ul style="list-style-type: none"> ・ まちづくり支援センターがやっている学生向けの御用聞きという支援もあるし、シルバー人材センターがやっている支援もある。それに対して、この仕組みは若い世代も含めてボランティアの年齢層が幅広い。そういうサービスがいくつかあっても構わない。重層的に参加できるサービスがあれば

発言委員等	意見
	<p>(参加できる対象年齢に違いがあるサービス) 一番身近で使いやすいものを住民が選べるので、そういう仕組みがあるといい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ なかなかこの仕組みに若い世代が入っていきづらい。個別の支援の展開の仕組みと、サロンのような集会的な活動へのサポーターに若い人たちが関わるためには、若い人たちから高齢者までが一緒に取り組める取り組みを続けていかないとこの仕組みは広がっていかない。中学校で一度福祉教育が切れてしまうとこの仕組みは広がっていかない。中学校で一度福祉教育が切れてしまう。また人生で地域の活動に戻ってくるのは高齢期が多い。継続的に中学校時代から地域の活動に参加すると楽しいよねと思ってもらい、その延長線上で住民参加型の仕組みに関わっていただけるといいのでは。広い視野で考えるといろんな年代層がいつでも参加できるような仕組みができることは大事。

(5) 他市の事例

②民間企業への連携(資料1の議題4②を説明)

発言委員等	意見
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当組織は次代を担う青少年育成を目的としたコンサートを行っている。また、他にも地域貢献活動を行っているが高齢者に対する個別の支援はこれまであまり実績がない。 ・ 以前、刈谷市の街づくりに関するアンケートを受けたので、将来の高齢化にともない高齢者が買い物等に利用する公共の送迎バスなどがあれば良いと回答した。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当組織では会員が運営者となって一日・半日型のミニデイサービスみたいなものを行っている。
アドバイザー	<ul style="list-style-type: none"> ・ 企業の方々の地域貢献という意識が高まってきている。企業の方にとっても地域貢献活動の実績を集約していくことも大切ではないかと思う。企業の方も身近な人の手助けとして考えていただけるといいのでは。企業の資源(ヒト・モノ・カネ)を提供するという取り組みも今までにあったのではないか。ガイドブックに情報を載せることで高齢者への情報提供につながるのではないか。企業も新聞などで地域貢献活動をPRしてほしいと思っている。そうすることで活動が活発化するのではないか。

(6) 第2層生活支援コーディネーター活動報告(資料2について説明)

発言委員等	意見
アドバイザー	<ul style="list-style-type: none"> ・ 刈谷市はポッチャ活動が普及しているため、多世代交流ができる。ポッチャなどの活動などから広げていくと多世代交流、地域交流につながるのでは。

【次回予定】

日時 令和5年11月16日(木) 13:30~15:00

場所 刈谷市役所 701会議室